

棹

太



若田力
しやを画

第
百
五
號

行發社棹太京東

ミカラチに腸胃

東京市日本橋區酒町二ノ十
新潮製藥株式會社
電話茅場町三八一三番
振替東京七〇一〇八番

松 幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園（千束二ノ三四）

牛鍋本店

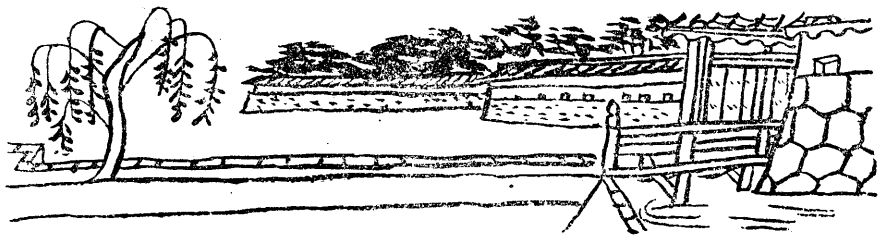
電話根岸 (87) 〇三八〇番
二〇〇〇番

風流・金ぷら・茶漬

【美地旬】

去月屋

新橋二ノ八
電銀二〇八



太 棹 第百五號目次

淨瑠璃道の大義を熟慮せよ……………是澤九似……………(二)

ラヂオ淨曲漫評……………金王丸……………(六)

義經腰越狀に就て……………因會一會員……………(九)

實事……………中野三允……………(一〇)

大日本素人淨瑠璃會成績表…………………………(三)

『太棹』總目次(四)…………………………(四)

會報…………………………(六)

—— 宮古氏をなぐさめる會・親孝行淨瑠璃會(M生)
 名作淨瑠璃同好會(川口子太郎)二三好會(森三好) ——

太 棹 社 彙 報…………………………(一七)

當 座 帳…………………………(一四)

編 輯 後 記……………芳河士記……………(一四)

表紙・カット…………………………宮尾しげを……………

淨瑠璃道の大義を熟慮せよ

併て大阪文樂協會の實演を希望し、土佐太夫一派の奮起を俟つ

是 澤 九 似

淨瑠璃節復興のためには、一般大衆の輿論と、同情も勿論必要であるが、實行の出來もせぬことを計畫したり、宣傳しても、それは壁に畫いた餅と同様で、喰ふことは出來ず、たと見て居るばかりで何の榮養にもならぬ。物の真相を把まないで、雑音と懸聲ばかりで、直接自分の利害に關係なければ時勢に従ふてゆくのが當世であり、長いものには捲かれた方が伶俐だと、所謂花より團子主義で居たのでは、何時までたつても埒ちが明かぬ、先づ現今の時勢と、人心の向ふところを洞察して、現實な具體策を實行することが肝要だ。日本内地では、今や舉國一致國內總動員で、一絲亂れぬ歩調のもとに、困苦に耐え、缺乏を忍んで、財のあるものは財を致し、智あるものは智を致し、術あるものは術を致して、今古未曾有の聖戰に、その持場々々に身を投げ出して義勇奉公の誠を致して居る。大義名分の日本精神に立脚して創作せられ、幾世の國民に合立した淨瑠璃節を、一般大衆の慰安として戰爭

に盡すことは、當然の義務であるばかりか、淨瑠璃節の復活から思ふても、まさに千歳一遇の好機である。軍人や官公吏のみが決して 陛下の赤子ではない、一般の民衆も等しく陛下の赤子であつて見れば、陛下の大御心は國中の臣民の全部が、同様に苦み、同様に樂み、同様に悦ぶことを欲し給ふのである。文樂協會もこの大御心を持って、誠心誠意に斯道の發展につくすことは、軍人が戦場でつくす氣持と些の違ひはないのである。今日の日本の現状から觀て、其場かぎり御座なりの仕事では凌げなくなつて來て居ることを考慮に置いて、眼を覺まさねばならぬ。

又と來ぬ淨瑠璃道の復興の好時機にあつて、協會が逡巡して懸聲ばかりで實行に移り得ぬのは、其形態に脆弱性があることを拒否む譯にはゆかぬ。協會が財團法人として創立した目的は、萎縮して居る斯界の不振を復活し、猶將來に於ける牢固たる基礎をつくることにあつたとすれば、種々の方策

を立て有意義に進出することは創立の目的に反する譯でもあるまい。一般の同好者は協會の進展を期待すると同時に、其目的完成の速かならんことを希望しつゝあるので、過般企てられたる實演さへも遂行困難なりし噂さを聴くことは、遺憾至極であり、餘りとは不甲斐なき限りである。仄聞すると協會が計畫の實演中止は、因會側の反對もあり、其他の方面へ遠慮氣兼ねありしやとの風評もあるが、果してかゝる事實があり得るとせば、斯道將來のために一大長嘆を禁じ得ぬばかりか、實に馬鹿々々しき不徳のことで、協會の幹部は自責の念をもつて、自分等の不明を天下の同情者に詫びると共に、遂行困難であつた事實を公開すべき責任があると思ふ。榮利を離れた財團のことで、私議の通るべき筈もなく、國家に對し、國民に對して徳義上の義務があることを思はねばなるまい。

人間は誰れでも、我が意のまゝにしたい慾望を持つて居ることは丁度子供が「おもちゃ」を獨占せんとする氣持と同じことで、之を抑制することが徳義といふ掟であるので、禽獸でさへ充分に餌食を與へて満腹したら、残つた分は他に譲るといふ、自動的の雅量を持つて居るのに、單なる自分勝手の手利害を打算に入れて、協會の發展する企にも反對せんとする氣持を抱く人があるとすれば、禽獸にも劣つたことで、かゝる人は百害あつて一益のない卑劣漢である。要するに協會が發達して來れば、淨瑠璃界の嬉ぶべきことで、従つて其潤

ひは間接に文樂座の股賑を招くことになる譯で、協會の發展することには、進んで因會も後援すべきが常道であり當然であらねばならぬ筈である。

少し話しが纏つて來ると、昨日の同志が敵となり、邪魔だと思つた人が案外に同情者であつたり、この種の企にはいつとても幹部連中は、重い車を牽いて長い坂路を上つて往くやうな氣持で、油斷したら車は直ぐに谷底へ墜落してしまふので、この點は互に戒め合ふて自重せねばならぬ。もし協會の目的が何かの事情のために行き詰まつて効果的に成就しなかつたとしたら、禍根が残されて將來かゝる後援的の財團の企は、法人としては創立不可能となるべく、従つて淨瑠璃界一般からしても、有形無形の關係を及ぼす事は勿論である、又成功すれば、斯道唯一の後援團體であり、輿論の機關となり、權威ある存在となるのである。過去二百五十年間傳統的本場の大阪に、未だ會てかゝる組織立つた後援財團がなかつたことさへ寧ろ不思議な一つで、現今文樂座付と他を合せて二三人の老人太夫が、なくなつたとしたら、將來の淨瑠璃界は果してどんな形によつて存在せられてゆくものか、思ふて見れば實もつて心細い限りである。大閣様と同様に、大阪名物の人形淨瑠璃を、活かすも、殺すも、唯、協會幹部諸賢の双肩にかゝつて居ることを、再思參考して、將來進展すべき針路と動向を、日本全國に散在して居る斯道の同情者に示してほしいのである。

現役に働いて居る斯道の玄人連中は、協會のことゝいへば恰も他人の身上であるかのやうに考へて、手を拱いて見て居らるゝが、明日は直ぐに我が身上に振りかゝる事をも熟慮せねばならぬ、火炎は既に隣家の軒を焼き立てつゝあるではないか。自分の立場からしても淨瑠璃第一主義であらねばならぬ、ましてや自分の生活關係からしても、又、將來後輩の生存してゆかねばならぬことから考へても、後援團體としての協會の成果を擧げることには、因會も、文樂後援團も、總合力を寬めて、日本人の特性に眼を覺まして、淨瑠璃道の大義名分の旗印を押し立て、國策の協力に順應すべきであるまいか。

昔の文樂藝術崇拜の時代と比較しては、興行界も非常なる大敵ばかりを對手としての競争である、經營はこの後益々困難になつて來ることを思ふて觀れば、牢固なる後援團體の出來ることは焦眉の急であり、將來は無くてはならぬ大切な機關である。感情にかられたり、誤解を生じたりして、内部の摩擦やら、相刺などは、互に慎んで大乘的の氣持ちで、反省自肅して、將來微動だにせぬ實力ある協會を造りあげるこゝとが緊急事である。

大阪文樂協會の核心の機微を窺ひ知らぬ門外漢の吾等が、是非の批評をすることは僭越であり、恰も他人の痲氣を頭痛に腦むやうなそしりもあらふが、いろ／＼の風評が傳へられて、協會の方針が長鞭馬腹に及ばぬ憾があるために、敢てこ

の文を綴つて協會の猛省を促したのである。

文樂協會の創立に參割して、協會の幹部で重責を帯びられてゐる竹本土佐太夫氏に吾等の希望を率直に述べて見る。

斯界の元老で、永年間終始現役で藝の第一戦に立ち、功成り名とげて隱退され、更らに斯界將來のために發奮して、協會創立のために貢獻せらるゝ決心と努力を觀て、流石に氏なればこそと敬服させられた。氏は素と後藤家二郎伯爵家の玄關子から、青年の頃身を藝界に投じ、あらゆる毀譽褒貶と種々の波瀾曲折を経て、晩年文樂へ入座して外様の取扱ひを甘受しながら、毅然として實力主義で、庵下の地位を贏ち得たが、氏のこの間の忍耐と健闘は、立志傳中の人で、其反面には風流文雅の道に通じて、茶事、書道、俳句、繪畫など多種多彩の含蓄は、自分の本職の光彩ある淨瑠璃の餘技といふ域を超えて、いづれも専門家の壘を摩して、或は堂に入り、奥に參じた趣味生活は深い興味と三昧の境地を悟り得た人で、しかも幾十年に渉る體驗は、藝界の實情に精通せらるゝばかりでなく、過去に多數の門下を養成し、隱退後も猶幾人かの内弟子を膝下に薫陶されつゝある氏を、このまゝに空しく山籠りさすことは、人物拂底の斯界のために惜まれるところであつたが、氏が決然の協會入りは、まさしく適任適所の仕事であり、協會の必ず躍進すべきことをも期待し渴望したのである。

凡そ物事を完成さすまでには、種々な障害も起り、幾多の

紆餘曲折はあるもので、之を知らぬ世間では、氏の協會入りは一種の謎であつたとし、氏は最初の抱負の實現に困難なことを感じて氣餒も鈍り、勇氣も萎靡して兎角逡巡がちだといふ、悲觀論者も生じて居る。どんな名案でもその實行の衝にあたる適任者を得ぬことには圓滑にはゆかぬ、機械にしてもこれを操縱する熟練な職員を必要とするやうに、名案を實現してゆける練達な人物が大切で、夫れもたゞ單なる技術ばかりでは駄目で、魂を打ち込み生命がけでかゝらねば意義ある仕事は出来ぬ、人間の個性の異つた連中を集めて之を指導し興行化して、毎時鼓舞し激勵して、藝術に對しては大乗的の抱負を持つて、時代と民衆に沿ふべく一路邁進してゆく人ではなくては効果は揚がらぬ、この實現に耐えうるものは氏をおいては他に恐らくあり得ぬと觀ることは誰人でも異論はあるまい。

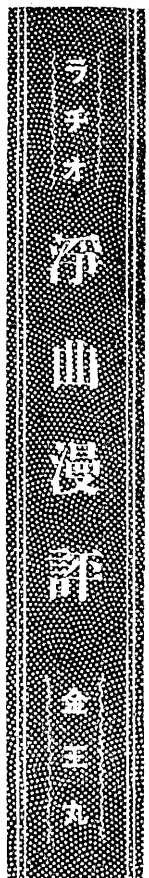
氏が協會への實在は内部は兎も角として、外から觀ると衆人の期待的であり、協會の權威であると同時に、世間からは有形無形に氏の行動を刮目して居り、従つて其責任も重大であると思ふのである。

すべての點で幹部一同は自我に目覺めて、危惧の念を去り虚心坦懷で、善きも、惡しきも信じ切らねば、成果は擧がらぬ、その上に何にも恐れぬ自主獨往の氣魄がある同志の結合があつてこそ權威が出来、實力も備はる譯で、幹部連中が自我にも目覺めず、自主も放棄して協力善處出来ぬとすれ

ば、一切の他力本願をかなぐり捨て、氏の實力主義に歸つて、行動を共にする一派一門を率ひて、奮起して實演をもつて天下の大衆に範を示すことである。一時其場凌ぎの跋行的の他力主義を用いて見ても、結果は遂に跋行策のために後人に嗤ひを残すことを氏の名譽のために惜むのである。この際氏と一致する一派を結束して、斯道のために先鞭をつけることである、そして重大時局に於ける國民の聲を味方として厭起せられんことを切望して擱筆する。五月十六日脱稿

忠臣藏俳句 寶家佳翁

- 初 段 (兜改め) 虫干や兜にかほる 蘭奢待
 二 段 目 (松切り) 松切て月を馳走のむしろかな
 三 段 目 (喧嘩場) 晒井ややれ待ちかねた時鳥
 四 段 目 (切 腹) 一聲ややれ待ちかねた時鳥
 五 段 目 (二つ玉) 夕立に手傷洗ふや手負猪
 六 段 目 (身 賣) なき乍ら賣られて行くや籠の虫
 七 段 目 (茶屋場) 高樓に吹かれて涼し酒の酔
 八 段 目 (道 行) 時雨るゝや可愛さにさす旅衣
 九 段 目 (山 科) 夜寒く巢籠る鶴の羽叩き
 十 段 目 (天川屋) いざと言は散るべき花の悟覺かな
 十一 段 目 (討 入) 炭部屋に啼く音も細しきりくす
 十二 段 目 (饒 香) 枯てさへ尾花は花とよばれけり



絃 竹 澤 重 造

文樂中堅 [五月十八日]

新 作 恩 讐 の 彼 方 へ —— 洞 門 の 段 ——

竹 本 織 太 夫
絃 竹 澤 團 六
絃 野 澤 吉 季

原作は菊池寛の出世作、嘗ては『敵討以上』と題し、作者自身に脚色して、先代勘彌の文藝座をして、帝劇の舞臺に脚光を浴びさせたもの。その三幕目洞門のクライマックスともいふべき一齣を、今度食満南北氏が浄曲化し、織太夫と團六のコンビで新たに作曲したものである。『この間二十年相經ち申候』といふ後年の出来事であれば、原作を知らぬ人にはアナウンサーの解説を聴き落しては、甚だ譯の判らぬものとなる嫌ひがあり、更らに了海和尚と實之助との二人だけの芝

居であつて、局面の淋しさも、大衆の興味には如何かと思はれるが、織太夫は、よくこの凄愴なる舞臺面を顯現し、團六の絃亦たよく、槌の音、瀬鳴りの音等の伴奏の合方を聴かせて、この新曲の新しき試みを示し得た事であつた。『月影もれし岩穴に、互に手に手を取かはし、本願成就の喜びは、たとへん方も注く涙』で始めてポテンを一つ聴かせただけの淋しい上りであるが、段切りの莊重さもよく、約四十分の丁場を倦きさせなかつたことを多としやう。新作待望の聲漸く起る近頃、際物でない品物で、これだけのものは、容易に得られぬかも知れぬと思ふ。

文樂巨頭 [五月二十四日]

一 谷 敏 軍 記 —— 熊 谷 陣 屋 の 段 ——

豊竹古靱太夫

邦樂名曲選の第二回として選ばれたものといふ、古靱さんの『陣屋』何と魅力一〇〇パーセントである。

先づ聴く『相模は障子おし開き……』から紙一枚。いつもながら、その足の長いこと、特殊の古靱ぶしも充分に『軍次はやがて覆ひになり……』から漸く平常に復したといふ恰好。この長いのに批難の聲もあるやうだが、我等はとくと聴きしんで、靜かに榮三の大舞臺を聯想すれば、アノ位ドツシリと語らなければ、この三段目の大物が鑑賞されず、舞臺の寸法が合はぬやうな氣がして、必ずしも反對する事はないとおもつたのであつた。さて、一般評に出て來るやうに、例的研究的な、理知的？な、神經過敏的な語り口で、グイ／＼と聴者の耳を惹きつけてゆき、夢のやうに、アレ／＼と熊谷の物語りも濟んでしまつたは何たる事ぞ、おぞましの評者の耳よ。唯だ到る處、巧いなア、とおもふ地イロのおもしろさ！ア、氣の毒やなア、とおもふ高い所のあ

苦吟！例へば『涙は胸にせき上げし』や『一の谷へは向ひしぞ』や『すゝめてやりし可愛いやな』の如き、先代清六にこんな迄叩きつけられたか、とおもふばかりのいとしさである。最後に至つて『軍次は居らぬか』の微妙な、何ともいへぬ節廻しに感服すると、チョンとなつた残り惜しさであつた。重造君の絃は非常に憤み深く無論邪魔にならぬ苦心の撥捌きで、この大家の藝術を相應に授けた點を買はねばならぬ。

東京女義

〔五月二十九日〕

加賀見山舊錦繪 Ⅱ 草履打の段 Ⅱ

竹本越道
絃豊澤猿幸

東京女義の若手賣出しのチャキ、野澤道之助師の秘藏弟子越道さん、猿之助師の同じく秘藏弟子猿幸を絃に得て、鏡山の草履打とは、格好の好い演し物。二嬢ながら藝熱心の効、こゝに現はれて近頃傾聴に値ひするものがあつた。女義特有のキイ、いふ金屬的の處が無く

て好い咽に、癖やイヤミの微塵も無い節廻し、詞も相應にこなれてゐて、品位もあり、殊に、前受けを狙はぬ情を語つて頗る結構。慾には岩藤に、今少しドスを利かせ得れば完璧であるが、要するに、『草履打』といふ語り物がピツタリと嵌つた手柄といふ事が出来る。これが次の長局になつたならサテどうあらうかと、一度聴きたいと思つたほど引きつけられた。猿幸さんの達者な撥捌きが、シカモ謹しんで邪魔になるカケ聲も無かつたのは豪い。

文樂紋下

〔六月一日〕

傾城反魂香 Ⅱ 土佐將監閑居の段 Ⅱ

竹本津太夫
絃鶴澤綱造

俗にいふこの『吃又』の上るりは、大近松の『傾城反魂香』を吉田冠子や三好松洛などで改作したものであるから、これを竹本座に上演した時の藝題『名筆傾城鑑』の方が正しいのではあるまいか。

そして、この吃の段は、その四段目の切になつてゐる。それはともあれ、紋下の吃又は、例の引き吃の研究もあつて、得意中の得意ものであつて見れば、もう文句も何もない。唯だ全段丸コカシ(稽古本によると紙半枚ばかり抜いた處がある)五十四五分、樂々とシカモ息も吐かせぬおもしろさ。女房のシャベリなど、此の太夫の口から、あアした條りをこんなにまで聴かせるのは、むしろ不思議な位。更に、又平の述懐、苦悶、咆哮、歡喜、眞似も及びもつかぬものとはかりに傾聴したのである。殊に絶望のドン底になつて『口に入手を入れ舌をつめつて泣きけるは』の處や、修理之介に縋り付き、さては女房に狂人といはれたを痛恨するあたりの泣き聲などに至つては、ゾツとするほど凄絶慘絶の極みであつた。綱造の絃亦た精彩突々たるものがあり、『硯引きよせ墨すれば』……で寛市のツレ彈がはいり、舞臺の人形の動きも眼前に髣髴するばかりであつた。

傾城阿波の鳴門 十郎兵衛内段

前 豊竹駒太夫

絃 鶴澤清二郎

奥 豊竹呂太夫

絃 鶴澤寛治郎

文樂座六月興行の中繼放送である。前半の駒太夫、後半の呂太夫は蓋し適材適所の語り物であらう。駒は先づノツケの武太六の貸し金督促の條りをぬいて、いつもの通り『元來し道へ立歸る』でお弓の心がよりと封押し切りから語り出し、最初の獨白から、盗み騙りも身慾にせぬあたりまで、やゝ時代がよつて、やがてお鶴の普陀落やの出、テモしほらしい順禮衆、ドレ〜報謝、からガラリと生世話調子に變る巧さ、大得心である。御詠歌の結構な事勿論、お鶴の『夜は抱かれて寝やしやんす……』など、正にホロリとさせ、ま一度顔をと引 寄せての愁嘆場、充分に堪へさせて、我が駒太夫の眞價を發揮した。

呂太夫は、既に其日も入相の……から後半、十郎兵衛の世話時代、侍の心を忘れぬ詞使ひは、確かにそれと受取られたが、大體に於て早口の、殊にお弓が歸つて來てからのヤトリなど、何が何やら天で聴き取れぬ口捌になつてしまつたには大に困つた。無論、拙い人では無い筈だが、この鳴門は失敗であつて、前の駒さんとは格段の相違であつたのは遺憾である。

絃の清二郎と寛治郎。前者は伊達太夫を弾いてゐた時分から、若いに似合はぬ柔かい撥捌きだとおもつてゐたが、駒太夫について更らに健實の度を加へて來たらしい。後者は、團六から改名して一段と手を上げ、今夜など誠に申分の無い弾き手となつたと思つた。

東京女義 「六月十二日」

本朝廿四孝 十種香の段

竹本 越駒

絃 鶴澤 紋教

與へられた時間二十五分とある。され

ば、行水の、の出から、御經讀誦の鈴の音で、次のこなたも同じ松虫の、の濡衣を先づバクツて『申し勝頼様』と例の、たましひかへす反魂香、になり、續いて『飛び立つ心』から、勝頼様ぢやないかいのと、まで飛んで、思はず一ト間を、になり、更らに『御廉相あるな』から、何枚刎ねたか『微塵覺えのない養作』までをぬき、同じ羽色の鳥つばさ、を充分に唄つて『緋り付いたる恨み泣き』でチヨン。であつた。要するに、姫の唄う所だけを特選した演し物で、越駒君思ふ存分に美聲を發揮し、悪く言へば頗る付濃厚で、宛かもお女女郎さアの如き八重垣姫、とお見上げ申した。こんな殿御と添ひ臥しの、など、その儘大に氣分を出したものだつた。養作は、勝頼といふ武人だといふ吐か、アノ前髪の赤い衣裳を裏切つた威張り方、濡衣も、高島田の立ヤノ字といふ腰元とは、恐らく思へず老けたをばさんのやうであり、四段目、金襴の奥御殿といふ事を少しく研究して貰ひたい。紋教君の絃には異論は無い。

義經腰越狀に就て

因會一會員

帝都義太夫因會は春季大會を、去る六月廿三日、日本橋俱樂部に於て華々しく開催を致しました、その開演の初めに、

掛合として、『義經腰越狀』を會員の方々によつて演じられました。此原作は享保二十年二月七日より大阪豊竹座興行、並木宗輔の作になる『雨蠻鐵後藤目貫』を改作したものを、延享六年三月江戸の肥前座にて『義經新含狀』と題して興行しましたが、其通し場の内部に聊か幕府の嫌疑に觸れる所があつてか、此興行は中止となると同時に其版本も禁止となつた模様で有ります。其後再び大阪豊竹座上演興行の際、座本豊竹越前少掾はこの院本を改題改作をして『義經腰越狀』と改め、作者は千路莊主人の名によつて三段目迄を前淨瑠璃として、切は釜淵双級巴の二度目を附物として、寶曆四年七月廿九日初日にて開場しました。その際發行した初版丸本の跋に。

櫻木の咲を見まねや造花とは往年江戸さかい町において門人肥前掾今退居稱豊竹宮内二操座にて興行せし義經新含狀の後序に口號け類所の一章なり今茲華陽の諸名君懇に貴望三あ類によつて右古本を取よせ前淨瑠璃となせり志かはありと吾妻の美曲を幾内の風流にすぐさま用ゆる時は千山萬水を隔ぬれば氣稟のひとしからざ類によつて感應の不

同あるが故に津の國のいくたひかくり返し巻戻し難波津のよしあし蘆邊の汐のさし引をなして文段の章句を改め墨譜の博士を正し末を略して三段の前淨るりとなす題號を改義經腰越狀と號待り野句に曰

照り勝しさくら紅葉や二度の晴

寶曆甲戌初秋念九

千路莊主人守常識

『千路莊と云は門人肥前と記入しあれば或は越前少掾の別名か』尙外題年鑑に明和七寅年正月十五日より北堀江市の側芝居豊竹座外題中に義經腰越狀とあり、これは四段目丸一段新作とあります、又聲曲類算に右作者を記して四段目一段は應律の新作になると有り。又豊竹應律は若太夫芝居座主にて越前少掾の孫で、通稱甚六と云た人です。此時發行した再版本に娘景清八嶋日記を合本として出版しました。(敬稱略)

東都五十義會採點表訂正

前號掲載の第卅回東都五十義會採點表は、本誌發行前に發表された淨瑠璃時報の採點表をそのまま轉載させて貰つたものでありますが、一二三、五〇(橋氏)が洩れておましたのでこゝに追加訂正致します。なほ星野桔梗氏より送られた正確の番附に依りますと、やまと氏(一三〇、二五)生昇氏(一三〇、〇〇)網路氏(一一六、五〇)鶴三氏(一一四、七五)と發表されてをりますので、これも訂正深謝致します。



實事

ものがたり
譚

中野三允 紹介

二代目高尾、石井常右衛門の實説

二代目高尾、世に石井高尾といふ。高尾數代のうち尤も全盛を以て當時に聞えたり。此の妓を石井と號することは由來有ることなれば、左に其の實説を掲ぐべし。

其のころ近江國彦根の城主井伊掃部頭直高君の家臣に石井吉兵衛元政といふ人有りけり。(演劇及び俗説にては常右衛門と名を變す)二男なれども其才衆人にすぐれたれば、特旨を以て新たに家祿を賜はり一家を起し、直高君に仕へたるが、文武二道に通ぜるのみならず詩歌管絃等の遊藝に達し、日夜直高君の側に近侍して職務に怠りなかりしかば、君も深くこれを愛し、恩遇優渥にして遙かに等輩を躋えたりけり。歳十九のとき直高君江戸へ下られければ御供して同じく江戸に來り、藩邸に僑居しけるが、其の年の事にや、或る人の誘引にまかせて新吉原の廓に遊び、三浦屋にて二代目高尾を迎へて一夜の枕をかはしけるに、いかなる前世の契りなや、互ひに

思ひ思はれて、高尾も深く吉兵衛を慕へば、吉兵衛も亦高尾のことの忘れやらす、二夜を三夜と重ぬる枕に深くも行末の事を誓ひて、此の世はおろか未來永々までの夫婦にならんと言ひ替せしに、其の年も早や暮れて、翌年の春ともなりぬるが、通ひなれたる路なれば、二月の餘寒も袖に覺えず、三月の花もうつらふ頃となりたりけり。

實にや物事には限り有れば、千年の松も時としては枯れ、萬歳の巖も碎くる習ひなるに、別けて浮川竹の流れの身なれば、逢ふ人がらのうちにも、思はぬに添ふ例有りて、或る客の屢々高尾の許へ通ひ來ぬるものありしが、終に身受けせんことと定りければ、高尾は大いに驚きて、此の由をさら／＼玉章に認めて吉兵衛の許へぞ送りける。

しかるに此の日は井伊家に於ては和歌の會を催され、都下の韻士詠客も數多集ひて、直高君の機嫌も殊の外に麗はしく見えたるを、吉兵衛もかねて歌の達人と聞えたれば、席に列りて頻りに和歌を詠じむるに、午過ぎのほど高尾の許より

あまたしく玉章とゞきて、悉しきことは認めなければ申すこと
のあれば只今御通ひあれとのみ申遣せり。吉兵衛はこれを覽
て飛立つばかりに思ひたれども、和歌の會はいまだ半ば過ぎ
ざれば、詮方なく胸をいためて居たりしうち、其の夜も早や
更けて、和歌の會全く終りて人々の家に歸りたるは殆んど辰
の刻ばかりなりけり。

吉兵衛も席を退きて邸内の厩舎に皈へりけるが、最早、刻
限を過ぎたることなれば、出入の門を堅く閉ぢられ出づるこ
とならざれば、函谷の關は雞の空音に開けしとかや、アハレ
心ある雞ならば宵鳴せよかしなど、はかなき事を思ひつゞけ
て、悵然として孤燈の下に座しゐたるに、折しも戸をほく
とと打敲きて、同勤の若輩二三人入り來りていふやうは、晝
のほどより吉兵衛の容貌たゞならぬは、物思ひの堪へざるに
や、又は病にも起りたるやと問ひて來よと殿の公命なれば
斯くは故々訪來れり。包まず吾等に語られよと申達しければ
吉兵衛は早や憂ひの顔色に現はれしかと、ハツと一時は驚まし
が、胸を靜めて、是は忝けなき殿の上意かな、されどいさゝ
か胸に心配のこともなく、又病とても起らざれば、各々方に
は御覽せられ候通り殿へよしなに傳へてたべ、早や夜も漸く
更けたれば疾く立販りて休息あられよと仔細もなげに答へけ
れば、さらばとて傍輩(原文のまゝ)は館へ販りて此の旨を直
高君に復命せしに、直高君はつくづくと考へられて、是は愚
ぼるものゝ知るところにあらず疾く吉兵衛を呼ぶべしとあり

ければ、そのまゝ再び吉兵衛の厩舎に赴きて殿の御召なれば
即時に出頭いたされよと命を傳へければ、吉兵衛もいかゞの
ことゝは思へども君命なれば黙しがたく、時も移さず御前に
伺候しぬ。

直高君は吉兵衛を見たまひて、汝、今日不快の體、嘸かし
難儀ならん。邸内の厩舎は狭ふして保養も心のまゝになりが
たければ、是より出入のものゝ方へ赴きて此の枕を用ひて病
を養ふべしとて、手づから一個の木枕を取りて賜はりぬ。吉
兵衛は君恩の天より大なるを感謝して押戴き、其のまゝ吾が
舎へは販らずして、急ぎて邸の門を出で、枕を携へたるまゝ、
辻輿を飛ばせ、風を切つて日本堤へ赴きしが、漸うにして引
四つの鐘音信るゝころ廊の揚屋紅雀屋へぞ至りける。(紅雀屋
は其の後斷絶して無し、今田町より土手へ上る迄に紅雀長屋
の名稱を存せり、是れ即ち昔の地なり)

内よりは皆々出迎へて、是は石井さまにて候か遅かりし、
先刻より度々三浦屋よりの御使にてこそ候へ、早う高尾の君
へ御知らせ申すべしとて亭主は遽たゞしく出行きけるが、暫
くあれども歸り來ず、女房は心を熬ちてアナ内の人の心の長
さよ、イデ一走り往きて來んとて急ぎ出行きしが、間もなく
女房は顔色を變じて息もたゆげに駈け來りて、大變なり々々
と告げれば、吉兵衛は、大變とは何事ぞと問ふに、女房は息
もつきあへず、高尾どのは自害したりと言ふにぞ、吉兵衛は
大いに驚きて、そはしなしたり仔細ぞ有らん疾く赴きて譯を

問はん、三浦屋へ駈行きて高尾の傍に立ちよりにて、吉兵衛参りたり、何とて斯くは早まりしぞと聲高らかに呼びければ高尾は最期の息も絶え／＼に吉兵衛が裾にすがりて眼を見開き、吉兵衛の顔をながめて一言の詞もなく粲然笑ひしが此の世の名残にて、其のまゝ息は絶え果てたり。

吉兵衛は哀しさいふばかりなく、四邊を見廻せば一通の書有りて上に書置と認めれば、みな／＼打集り披き見るに、石井の君と深く誓ひし甲斐もなう思はぬ人の身請と事定りぬ。されども、石井の君の薄き力にては及びがたきことなれば、今日君の来りたまひなば俱に死して西の御國にて添ひまゐらせんと待ちつるに、夜も半ばを過ぐれども君の來ませねば、ひとり先だち死をいそぎ操をたてんとてかくこそ思ひきはめはべりぬ。尙ほ無き後をも忘れず訪らひたまはらば、來世にて待ち申さんと事哀れに書きたれば、人々はさらなり吉兵衛は兩の袂につゝみかぬるまで涙に咽ひしが、かゝる數きに逢ふうへは主君より給はりたる此の枕をも何にかせんと言ひつゝ、不圖抽斗の内を見るに、黄金の色輝きければ、是は仔細ぞあらめと引出を抽きたれば、中より 數百の小判さら／＼と四邊を照らして祥り出でたり。

吉兵衛はます／＼驚きて、やがて邸の方を遙拜して斯かる厚き君恩を蒙りて何時の世にかは報いまゐらせんと、暫し默然として居たりしが、やがて枕の内の黄金を以て高尾の菩提を吊ひ、僧を迎へ經を誦し、厚く野邊の送りを營みけり。

其の後、吉兵衛は只願此の事をのみ悲しみて、うつら／＼と目を送りけるが、終に病となりて引籠りてゐたりしに、此の年も早や卯月となり、直高君には本國へ版城されければ吉兵衛も御供して江戸を立ち出しが、深くも浮世のはかなきを歎じ、出家遁世なしたき望みを起し、道すがら直高君に此の事を願ひたるに、頓には許可もなかりしが、近江の草津驛にいたりしとき始めて暇を賜はりしかば、打喜びて終に髪を削りて佛門に入り、名をも元政と改め、法華の行者となりぬ。

此の時、年僅に二十なりしが、其の後學徳大いに進みて、佛道のみならず、禪餘の業には詩文にも妙を得て、末世に高德の名を遣せる深草の元政師とは即ち此の石井吉兵衛の事なり。

子規を中心とする明治俳壇の回顧
の一節 俳句三代集月報第一號)

中野 三 尤

子規の逝いた時私は大阪に居つた。翌二十日松村鬼史の案内で、初めて文樂を聴き、文樂を出てから鬼史と別れ、大阪満月會に出席した。席に着くと、青々や露石から子規の訃を傳へられて愕然とした。そんな譯で私は子規の葬儀に参列が出来なかつたのである。

私は文樂を聴く毎に、明治三十五年九月十九日の子規の死を憶ふ。

『太棹』總目次

(四)

自第壹號
至第百號

▼あまり長引きますから、今回から主なるもののみを掲載する事に致しました。

丸) 其他

▼第卅八號——成功難の義太夫業(岡田翠雨)▼淨曲うる覚え(田中煙亭)▼響阿彌談片▼津賀太夫と猿之助圓滿解決▼加賀見山舊錦繪(廿)▼稽古見臺(黒顔子)其他▼寫真(津賀太夫猿之助和解記念・同食堂に集つた人々)

▼第卅三號——國粹保存の意味から(薄田斬雲)▼紅紫園雜話(岡田翠雨)▼榮三と文五郎氏の人形振りに就て(是澤

悟園)▼淨曲うる覚え(田中煙亭)▼昭和六年竹本劇總勘定(園城寺清臣)▼人形使であつた家兄の事蹟(岡田翠雨)▼平賀源内(田中烏城)▼加賀見山舊錦繪(一七)其他▼寫真(勘作住家・小泉蛙鳴)

召集令狀を受けて(河野義昇)其他▼寫真(河野義昇氏近影)(竹本津太夫と見臺)(通話會劇)

▼第卅七號——三勇士のスナツプに題して(小泉蛙鳴)▼人形使であつた家兄の事蹟(岡田翠雨)▼大阪者が東京で見

▼卅六號——人形使であつた家兄の事蹟(岡田翠雨)▼淨曲うる覚え(田中煙亭)▼湊町は住太夫師の十八番(竹本土佐太夫)▼三勇士名譽肉弾(松居松翁作鶴澤友次郎曲)▼劇評(伊原青々園)其他▼寫真(太棹後援東都素義大會)(東都聲義會)

▼第卅九號——成功難の義太夫業(岡田翠雨)▼文樂の新上演に就て(本山荻舟・岡鬼太郎・伊原青々園・三宅周太郎・岡田翠雨・宮仲太郎・河東碧梧桐・山崎紫紅・平山蘆江・森下蟻洞・豊澤猿藏・木谷蓬吟・中野三允・豊澤團市・濱村米藏・佐藤惣之助・長谷川仲)▼淨曲うる覚え(田中煙亭)▼加賀見山舊錦繪(廿一)▼稽古見臺(黒顔子)其他▼寫真(東都義太夫會出演諸氏)(竹澤龍造一座)

▼卅四・五號——紅紫園雜話(岡田翠雨)▼通話會劇(たの字)▼私の考へてゐる事を露骨に謂へば(竹本伊達子)▼加賀見山舊錦繪(十八)▼文樂座藝評(是澤悟園)▼淨曲うる覚え(田中煙亭)▼人形使であつた家兄の事蹟(岡田翠雨)

▼第卅七號——三勇士のスナツプに題して(小泉蛙鳴)▼人形使であつた家兄の事蹟(岡田翠雨)▼大阪者が東京で見

▼第四十號——成功難の義太夫業(岡田翠雨)▼人形淨瑠璃の新作に就て(石割松太郎)▼淨曲うる覚え(田中煙亭)▼新作を聴いての發見(森下蟻洞)▼南方松若君と古靱太夫師(夏井金石)▼驪山比翼塚(一)▼稽古見臺(黒顔子)

其他▼寫眞(本社主催東都義太夫會出演諸氏)

第四十一號——▼紅紫園雜話(岡田翠雨)

▼古靱太夫に謝す(夏井金石)▼淨曲うろ覺え(田中煙亭)▼稽古見臺(黒顔子)

▼文學雜記(里の火)▼驪山比翼塚(二)

其他

▼第四十二號——▼紅紫園雜話(岡田翠雨)▼淨曲うろ覺え(田中煙亭)▼驪山比翼塚(三)▼因會雜感雜記(五つ紋)

▼稽古見臺(黒顔子)▼素女さんと杉山先生(竹下もと子)其他▼寫眞(寶藏寺天昇氏と竹本巴津昇師)

▼第四十三號——▼七福神寶の入船の作曲者(豊澤松太郎)▼紅紫園雜話(岡田翠雨)▼淨曲うろ覺え(田中煙亭)▼昭和七年竹本劇總勘定(園城寺清臣)驪山比翼塚(四)稽古見臺(黒顔子)▼大阪東京間飛行旅行に就て(福田都)其他▼寫眞(身振劇東都義太夫會出演諸氏)(豊澤松太郎師近影)(豊澤松亮と同松四郎)(招友會の寺子屋)(太棹社編輯室より)

▼第四十四・五號——▼文學座紋下争ひ

の内紛暴露(森下辰之助)▼紅紫園雜話(岡田翠雨)▼淨曲うろ覺え(田中煙亭)

▼逝ける竹本朝太夫(梅本香伯・木谷蓮吟・三宅孤軒・夏井金石・三宅周太郎・石割松太郎・山崎紫紅・平山蘆江・竹本津太夫・豊澤猿藏・竹本稻太夫)▼紅紫園雜話拜讀(瀬戸半眠)▼驪山比翼塚(五)▼稽古見臺(黒顔子)其他▼寫眞(巴津天會披露會・竹本巴津昇師・同綴帳縮寫)(芳河士作品)

▼四十六・七號——▼文學の危機▼紋下辭任問題の真相(木村猪之助)▼紅紫園雜話(岡田翠雨)▼淨曲うろ覺え(田中煙亭)▼淨瑠璃が露はす感情(波多野光雨)▼人形淨瑠璃の血まみれ修業(小倉敬三)▼驪山比翼塚(六)▼稽古見臺(黒顔子)其他

▼第四十八號——▼幡隨院長兵衛の少年時代(一)(竹下仁七)▼淨曲うろ覺え(田中煙亭)▼驪山比翼塚(七)▼稽古見臺(黒顔子)▼在りし日の呂昇は語る▼鮎屋の傳説と千本櫻のあら筋・其他▼寫眞(兜會春季大會)(聲義會春季大會)

▼第四十九・五十號——▼紅紫園雜話(岡田翠雨)▼女義太夫生立の由來(谷龍之助)▼幡隨院長兵衛の少年時代(竹下仁七)▼淨曲うろ覺え(田中煙亭)▼人形漫談(吉田文五郎・吉田榮三)▼義太夫新聞の帝義會とやら組織に就て(青山峰水)▼驪山比翼塚(八)其他▼寫眞(豊澤雷之助並に豊竹巴磨太夫の大會披露當り物)

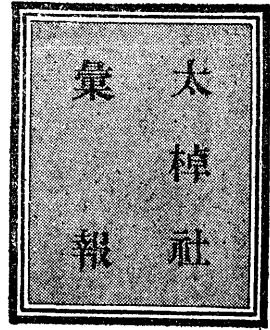
かに・天ぷら

御料理

深川區白河町一ノ六
(區役所通り)

二葉

錦さと



東都五十義會幹部

義太夫大會

東都五十義會主催、横濱花競會、自由（龜鶴、重子）紙治（操、道之助）宿屋のの後援の下に六月廿九、卅、七月一日（美峰、猿之助）挨拶（理事）掛合野崎村の三日間毎夕六時より横濱幸友俱樂部に開催、番組左の通り。

（初日）五斗（呑笑、重吉）十種香都（猿之助）

昇、都太夫）身賣（清、道之助）逆櫓（旭道之助）挨拶（理事）掛合布四（行綱、文久。小櫻、操。官女、旭。平次、光樂。藤作、桔梗。又五郎、三芳）絃（猿平）

（二日目）陣屋（呑笑、重吉）安達三事）掛合白石（宮城野、操。信夫、靜。

松、美峰。およし、市菊。母、桔梗）絃

（三日目）呑掛（希雀、辰六）忠六（がん昇、猿藏）寺子屋（桔梗、辰六）掛合雷門（雁九郎、清。どぜう、操。惣六、桔梗。おのぶ、靜）絃（道之助）挨拶（理

を催ほし、會費を始め凡てに於て輕便な

探勝會團體募集

安藤鶴夫

昭和十四年六月

敬具

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

記者

宮里、桔梗。宮柴、三芳。惣六、光樂）絃（道之助）

安藤鶴夫氏

都新聞社へ入社

安藤鶴夫（都昇）氏は今回精興社を圓滿退社の上都新聞社調査部に入社せられ演劇研究家たる氏の宿望が叶つたことは祝福に堪えない。氏の挨拶を左に

謹啓黨風の候益々御機嫌克く御過しの事と存上候扱て私儀此度精興社を圓滿退社致し都新聞社調査部に入社仕り候へば今後共何卒よろしく御指導の程厚く御願ひ申上候づれ拜肩萬々申上候へ共典禮乍ら寸書を以て御挨拶迄申上候

る事他の旅行會に前例を見ざる探勝會は
今回諏訪明神、善行寺參拜、信州山峽温
泉廻りを企て、出先にて出征遺家族慰安
義太夫會をも開催の計劃あり、素義界有
志の申込みを歓迎、目下團體募集中であ
る。日時は七月廿二日午後十一時五十五

日本帝都義太夫因會

男子部春季大會

六月廿三日午後三時より濱町日本橋俱
樂部に開催。

掛合五斗(五斗、東太夫。三郎、殿母
太夫。鬮女、浪花太夫。高の谷、駒登太
夫。徳女、都太夫)絃(道之助)組打(近
衛太夫、扇之助)百度平(稻太夫、兵吉)
新口(彌國太夫、寛三郎)鮎屋(駒登太
夫、扇之助)美濃屋(朝見太夫、芳太郎)
土橋(扇太夫、六兵衛)志度寺(さくら

分新宿驛發途中上諏訪温泉、戸倉温泉に
二泊、廿五日午後十一時四十五分上野驛
着、會費十五圓五十錢。詳細は事務所品
川驛前橋家族館本店へ(電話高輪四四九
七番)

太夫、条造)湊町(浪花太夫、猿平)逆
櫓(津彌太夫、延左衛門)沼津(紅葉太
夫、猿三郎、ツレ美之助)忠四(殿母太

夫、良造)山名屋(都太夫、龜造)太十
(東太夫、猿三郎)大切掛合千兩幟(おと
わ、近東太夫。猪名川、稻太夫。鐵ヶ嶽
彌國太夫。大阪屋、殿母太夫。呼使、扇
太夫)絃(紋左衛門、胡弓芳太郎)

米忠二、仙臺八雲の兩氏が入會せられた。
夏祭浪花鑑(九段横の内五段通し)堺
お鯛茶屋(掛合)磯之丞(忠二)佐賀右
衛門(淀橋)琴浦(子太郎)茶平(八雲)
お梶(愛水)戎島喧嘩(八雲)道行妹背
走書(淀橋)高津祭三婦内(王華)長町
裏泥仕合(掛合)九郎兵衛(宮古)義平
次(淀橋)田島町魚屋(忠二)同團七達
引(子太郎)大切。一谷嫩軍記二段目切
兎原の里、流しの杖(掛合)忠度(愛水)
景高(淀橋)菊の前(子太郎)林(王華)
六彌太(宮古)絃(和孝)

素玄淨曲研究會

第十回を六月廿九日午後六時より神田
美土代町キリスト教青年會館に於て開
催。

野崎(紫蝶、仙玉)合邦(高尾、巴住)
湊町(團雀、清二)

なほ次回は七月十九日夜、麴町公會堂
にて開催。

名作淨瑠瑠同好會

七月廿四日午後五時半より丸ノ内電氣
俱樂部に於て第三回を開催。今回より久

淨曲無名會

六月十七日午後四時より丸ノ内電気俱樂部に開催。
造)柳(美峰、猿之助)忠六(どくろ、司好)鮎屋(國聲、猿三郎)

太十(操、越道)三笠萬歳(長平、龜)

文樂座人形淨瑠璃の東上

大阪文樂座人形淨瑠璃は、こゝもと毎(交正俱樂部)

月本城四つ橋の文樂座に於て本格興行を以て盛況を續け、六月は第一彦山權現誓助劍を瓢箪棚から六助住家迄、第二増補大江山、第三名筆吃又平、第四傾城阿波の鳴門、第五壇浦兜軍記と好評裡に終演、しかし七月東上の豫定であつたが、都合上八月東上する事に決定し、今回は新橋演舞場にて長期興行の由である。

綾秀會

六月五日菊川俱樂部に、同七日同俱樂部に開催、満員の盛況を呈す。なほ次回は七月八日(入谷俱樂部)廿二、三日

雲井親子會

雲井、花柳、八雲氏の親子會が菊川俱樂部に催はされたが、八雲、花柳さんの孝道は高座樂屋に遺憾なく發揮され、母堂雲井女史のよろこび又一方ならず、綾秀會有志の應援出演もあり、和氣霽々と

して終演。

土橋(扇太夫)太十(掛合)鳴門(花柳)蝶八(八雲)忠六(掛合)忠九(掛合)大切忠七(掛合)絃(團七、綾秀)

仙照會生る

竹本仙照師後援の「仙照會」が、高橋宮古氏の發起で組織され、六月十日駒形俱樂部で第一回を開催。世話役宮古氏は風邪の爲め缺演されたが、當夜の番組は左の通り。

帶屋(かなめ)鳴門(清勝)太十前(岡玉)同奥(喜美子)寺子屋(東松)新口村(専好)絃(仙照)

五聲會

六月十九日木挽町木村屋別館ホールに於て開催。

又助(巖春太夫、美之助)先代(松樂染登)鮎屋(三芳、猿三郎)新口(茂里雄、清助)太十(聲鳳、猿之助)

若手會

六月十七日菊川俱樂部に開催。

岸姫（高尾、巴住）阿漕（柳光）太十（光玉）忠六（呂聲、力彌）壬生村（子太郎、和孝）新口（都昇、都太夫）合邦（平茶、富子）

米翁師病氣全快

祝賀義太夫會

六月廿四日午後四時より交正俱樂部に於て開催。

鈴木森（扇太夫、巴太夫）儀作（松蝶、巴太夫）寺子屋（秀峰、米翁）酒屋（蘇鳳、津賀昇）新口村（英、紋教）合邦（浪花、小津賀）先代（三葵、津賀昇）辨慶（松壽、紋教）寺子屋（やまと、米翁戀十）東春、津賀昇）又助（吳羽、米翁）安達（潮、巴太夫）大切、鞘當（不破、松蝶。名古屋、團壽）

互調會

六月廿日多加良俱樂部に開催。

柳（佳世子、佳照）太十（乃菊、佳照）寺子屋（山生、鹿重）三代記（みなと、良造）忠六（二三樂、蝶子）近八（義雀良造）

東司會生る

故人鈴木東司氏を偲ぶ爲め「東司會」を組織し、宮古、都菊、吾樂、都久志、優昇、愛玉、紅葉、一義の諸氏に依り、七月十一、十二日兩夜淀橋俱樂部に開催

松田文林氏

改名披露義太夫會

松田文林氏は今回「生久」と改名、その披露義太夫會を六月十三日入谷俱樂部に開催。

辨慶（吉歌）草履打（喜鳳）本下（正鳳）逆櫓（旭）鳴門（五口）帯屋（清）赤垣（生久）

杉山橋氏の建碑式

杉山橋氏は祖先の墓碑を小山町朗性寺

に建立、親戚知己を招待して五月二日法要を営みし後、午後一時より自宅にて義太夫會を催ほし、氏は太十を竹本重子、八陣を豊竹駒登太夫の絃にて語り、外に御殿（三浦あづま、重子）鳴門（重子彈語り）壺坂（駒登太夫、重子）などがあつて盛會な建碑記念の宴が張られた。因に墓碑は須田美義氏の工作である。

山邊龜呂久翁

追善義太夫會

六月十八日午後二時より、西堀呂鶴、陳野今昔、桑島團照氏發企にて淀橋俱樂部に開催。

壺坂（二三、梅葉）辨慶（口〇、梅葉）松王（團照、玉勝）沼津（今昔、兵二郎）合邦（呂鶴、呂若）本下（保）野崎（靜子、呂若）陣屋（千曲、呂若）先代（キヌ代、仲三郎）野崎（榮昇、梅葉）忠四（喬樂、呂寶）松王（正玉、梅葉）儀作（松糸、呂若）太十（美好、梅葉）岸姫（和雷、呂若）十種香（さら五、呂寶）日吉（龍鳳、巴住）太十（文晁、小

津賀)阿漕(司、昇登)又助(羽國、梅葉)

豊竹和國翁廿七回忌

追悼演奏會

六月十六日午後五時より文化俱樂部に

於て初代豊竹和國太夫師の廿七回忌追悼
義太夫會が豊竹和孝師主催にて催ほされ
同門の重之助、和歌吉師連の外名作淨瑠
璃同好會々員參加、三十分語りにて故人
の愛曲を語つて供養した。

竹本相模太夫追憶淨曲會

六月十一日正午より木挽町木村屋別館
に於て、義榮會主催のもとに故竹本相模
太夫師追憶淨曲會が、左記番組に依つて
催ほされた。

初手向、十種香(八重垣姫、菊泉。勝
頼、三葵。濡衣、さかえ。謙信、泉。六
郎、小文治、千曲)絃(寛三郎)組打(貴
水、貴友)彌作(つばめ、玉勝)柳(公
玉、寛三郎)太十(榮子、仙十郎)聚樂

町(永樂、巴住)太十(晴峰、仙十郎)
齋屋(四光、寛三郎)阿漕(語面、語左
衛門)八陣(泉、司好)先代(優子、寛
三郎)先代(三葵、寛三郎)歌舞伎十八
番(たかし)陣屋(千曲、團市)酒屋(夢
公、司好)寺子屋(さかえ、寛三郎)柳
(靜波、巴住)紙治(菊泉、寛三郎)忠四
(語松、寛三郎)二つ玉(有曲、糸樂)

胃腸に

ミラカチ

會

報

投稿
歡迎

宮古氏をなぐさめる會

高橋宮古氏は催ほし毎に五分か十分しか語
らず、時間を他に譲るといふこの奇特なる氏
の爲めに、豊竹和孝師が主催となり七月一日
夜文化俱樂部で愛米、子太郎、淀橋氏等出演
の下に宮古氏をなぐさめる會を催ほし、宮古
氏は當夜齋屋を九一段語られる事になつた。

親孝行淨るり會

M 生

五月廿八日午後三時より日本橋濱町の花柳
祿壽師の踊り舞臺で珍らしい淨曲會があつた
祿壽師の老母あかさんが八十四歳の高齢で上
るりが大好き、耳も眼もまだ達者といひ、若
い新富町の小玉姐さん時代から親孝行で評判
の祿壽さん、豫て馴染の御連中が相語らつて
一夕を娛しみ樂しませようといふ催しであつ
た、心ゆくばかり唸りまくるやつを終始ニコ
ニコして聴くお婆さんは、まことに佛さまの
やうに見えてめでたい極みであつた。番組は

左の如く、これを一くさりづゝ録音に取つて最後に押ばアさんの挨拶もレコードに納めて涙ぐましいまでの孝女祿壽師の笑顔もまためつたいものであつた。

堀川（鏡鳳）鳴戸（呂光）重の井（松雨）
沼津（鬼外）岡崎（北斗）酒屋（平茶）外
にカケ合「本下」七段目」があり、三味線は猿玉、重子、猿幸の三師であつた。

名作淨瑠璃同好會

川口子太郎

來月の廿四日名作淨瑠璃同好會第三回を開きます。都合上、今度から松林福笑氏はぬけられまして、他に兜會の中堅、仙臺八雲氏と私より二三年後輩のやはり慶應出の若手、久米君といふ人と二人同人がふえました。今度は「夏祭」を初段お鯛茶屋からお中清七道行のチヤリ場、高津祭お辰焼鐵、長町裏泥試合田島町圍七内迄通し、他に「一の谷」の流しの枝を添へました。私は掛合の琴浦と菊の前語り場は「田島町」ですが、これは今迄と勝手もちがつた純世話物でかなり内面的な心理描寫のものなので、テンア自信がありません。久米君がこの口を語つてくれます。身を殺してしまつた團七が家に引籠つて寢てばかりゐる、子供は親に似て腕白ざかり、近所の子供

をぶつたり、たゞいたりさわいでゐる。お棍が初七日の墓參りから戻つてくる——多分夏の夕ぐれで、まだ西日が一杯さしてゐて、向ふ側の家の片影が、地面をハツキリと白黒に染分けてゐる。日傘の影の中にお棍の顔が仄白く見える——柳があつて——今なら、横町の角に紙芝居が拍子木を鳴らしてゐるでもあらうやうな——日常生活の中に、ほのかな哀愁がたゞよつてゐて、何か大きな事件が起つて來さうな氣配がつかさか感ぜられる——私は義太夫の端場にさうしたよきを感じます。腹を切つたり、身替りになつたり、大オトシやクリ上げがふんだんに出るところよりも、こらした何でもないやうなところに、胸のうづしやうなものを感じます。通しの會を始めたのも、こらしたよきや、口から切へかゝるオクリの滋味、前とはガラリと違つた調子でしかし「見送つて——」と必ず前の人物がゐる、前を一寸ふりかへつた味嘆がついてゐて、扱切の事件が、夕闇が迫つて來るやうに徐々に起つて來る、そして段切になると、作中の人物を離れた第三者的な冷靜さを以て、全體の事件をふりかへつて、さびしい諦めとかなたため息を洩らした「世はさかさまの逆槽の松」式の文句に餘韻をこめたフシがつかれてゐる。さうした現代から見ても、立派な構成をもつた、完成した藝術である事を、少しでも世の人々にわかつてもらひたかつたからです、義太夫愛好者には更にさうした點の同感を求めたかつたからです。

二三好會の例會

森 三 好

初夏を前に梅雨期の六月十八日日曜日午後六時より新宿多加良俱樂部に於て二三好會第三回を開催せり。出演藝題は左の如し

（御祝儀十種香のし子）（六十むつみ）（寺子屋前、十三三）（寺子屋奥、一勝）（辨慶上使、みさを）（酒屋、村雨）野崎村、（三好）三味線（鶴澤二三壽、三好、喜三香）なほ牛込區肴町勝岡劇場に於て六月十日より開演中の坂東勝治劇純日本の歌舞伎に二三好會の出演、太功記十段目村雨三味線鶴澤龍之助本藏下郎三好彈語りにて好評を博し大入りの盛況を呈したり。

葉ざくら

三 久 女

葉櫻に待つ友の來て雨となり

葉櫻や水車もありて下り坂

葉櫻の雨に愛とし兒婦りゆく

本誌名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)

廣瀬ゝろは氏
吉川 浪補氏
阿部 一氏
北島 北斗氏
中澤 巴氏
安藤どくろ氏
吉田 登盛氏
小川 都山氏
安藤 都昇氏
保々 長平氏
栗原 千鶴氏
岸 竹史氏

神馬 里芳氏
岡本 柳光氏
本木 大熊氏
鈴木 和樂氏
小林 和舟氏
林 和勢氏
本多 可笑氏
飛石かなめ氏
加藤 兜氏
高橋 可遊氏
西田 可松氏
大用大嘉津氏
田口 辰壽氏

正田 大龍氏
井上 巽氏
小林太二八氏
根本 團壽氏
野田 高尾氏
杉山 橘氏
坂倉 素遊氏
浮谷 祖樂氏
川口子太郎氏
小埜長とろ氏
宮本 武藏氏
萩原うつぼ氏
乃村 乃菊氏
中野 吳羽氏
山下 彌生氏

國井 やまと氏
菅原 葉光氏
松林 福笑氏
鈴木 兒雀氏
水戸部 壽氏
原田 越巴氏
河野 國聲氏
松岡 語松氏
田中 湖月氏
湯淺 光玉氏
岡崎 田六氏
寶藏寺 天昇氏
大築 葵氏
松本 朝章氏
及川 旭氏

柳 有明氏
 中川 愛水氏
 寺岡 三幸氏
 木村 さかえ氏
 齋藤 山生氏
 平井 榮氏
 細川 清氏
 金田 金鳳氏
 錦 錦松氏
 淺田 奇聲氏
 歸山 歸世花氏
 猪谷 銀水氏
 岩木 義雀氏
 吉良 蟻若氏
 岩田 末成氏

高瀬 操氏
 吉田 美地匂氏
 横井 三由氏
 野口 みなと氏
 北村 三葵氏
 池田 三國氏
 吉田 三芳氏
 高橋 宮古氏
 鈴木 松寶氏
 小原 松樂氏
 菊池 秋月氏
 平井 壽樂氏
 山田 壽瓢氏
 田口 司重氏
 濱口 秋華氏

武笠 宏亮氏
 高品 一重氏
 平山 平茶氏
 桑原 美峰氏
 佐野 美昇氏
 松岡 茂里雄氏
 白井 清華氏
 近江 清華氏
 湯原 清司氏
 沼井 盛鶴氏
 時田 静史氏
 (地方之部)
 米國 平野一昇氏
 同 武榮玉氏
 同 杉山陶岳氏

同 兼廣廣玉氏
 同 西本西紫氏
 神戸岡田源氏
 大垣吉岡十八公氏
 船橋川奈部銀司氏
 下關保良鈴鳳氏
 横濱和田和朝氏
 同 霜島錦司氏
 八幡古賀大彌氏
 名譽會員
 小原 松樂氏
 林 和勢氏

本誌後援名譽會員を御快諾
 賜り難有奉深謝候

太 棹 社

近刊 東都素義名鑑

東都素義界に未だ名鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に會名其他の略傳を付し、近日「東都素義名鑑」の刊行を企てました。初め「東都素義名流大鑑」といふ名稱でありましたが、皆様の御意見もあり、今回「東都素義名鑑」と改める事に致しました。しかし、もつと良いい名稱がありましたなら何卒御教示を御願ひ申上ます。

五月頃には刊行の豫定でありましたが、今後こうした名鑑は五年十年の間には編纂不可能と存じますので、此際お一人も多く御賛同を仰ぎ度く、發行を延期致し極力勧誘申上げたいと存じます。

本名鑑は寫真本位として、一頁金拾貳圓（配本共）四六倍版、上質アート、和製チツ入にて装幀の高雅は、皆様の御机上に一層の光彩を添へる事と存じます。

弊社の此の企畫を御援助賜り、何卒御賛同御申込みを偏に御願ひ申上ます。

太
棹
社

昭和十四年六月廿三日印刷納本
昭和十四年六月廿五日發行

(毎月一回廿五日發行)

太

棹 (第百五號)

定價

金參拾錢

級

高

ルテホ和舟



地番五十目丁一門雷區草淺

(隣社會盡無生相)

番二六六五・一六六五(84)草淺話電